

港中だより

伊勢市立港中学校 特別号

R3. 3. 10

校長 金森 晃生

令和2年度 第74回卒業証書授与式

3月5日、伊勢市立港中学校の令和2年度 第74回卒業証書授与式が行われました。3年生にとっては、中学校3年間、義務教育9年間を終える最後の授業でした。3年生のみなさんはすばらしい主役となり、胸を張って、立派に港中学校を巣立って行ってくれました。たいへん素晴らしい卒業式でした。3年生のみなさんの新たな旅立ちを、私は大いに期待しています。式の中で、私が卒業生に話したこと（式辞）を、全部ではありませんが在校生のみなさんにも紹介します。また、卒業生が在校生のみなさんに残してくれた、答辞も紹介します。ぜひ読んでください。

式辞

今日の門出にあたり、これまでみなさんを支えてくれた、お家の方や友だちや先生をはじめ、多くの人がいたことを忘れないでください。また、すべての方々に感謝することを忘れないで下さい。これからは一人ひとりが自分の夢の実現のため、それぞれの道を切り開いていくことになるでしょう。その道は平たんな道ばかりではないかもしれません。でも、努力は必ず報われます。決して夢をあきらめずに努力し続けてください。

私から、港中学校を巣立っていくみなさんに、感謝と激励の気持ちを込めて、最後に一つだけ話をしたいと思います。

それは「思いやりの心」を忘れず、持ち続けてほしいということです。このことはいつもみなさんに伝えてきたことです。

昨年度の終わりから、これまで誰も経験したことのない、人の命を奪ってしまう新型コロナウイルス感染症が広がりました。コロナ禍といわれる中、みなさんは、義務教育最後の一年間を、学習や部活動や学校行事など、さらに日常生活でも感染症予防対策の様々な約束や制限を受け入れて過ごしてきました。我慢したこともたくさんあると思います。しかし、みなさんは、工夫したり、新しいことにチャレンジしたり、発想を変えたりしながら最上級生としてよく頑張ってきました。

これからは今まで以上に、科学や技術が進歩し、人工知能などが発達して、もっと便利で、もっと変化の激しい時代がくるでしょう。しかし、この一年の経験は、今後、きっと、みなさんの大きな力になると信じています。このコロナ禍を過ごしてきて、私たちは、困難な時こそ、「思いやりの心」で、隣の人のことをちょっと意識して、相手の気持ちを考えて、行動すれば、一つ一つ乗り越えていけるということを学んだように思います。そして、これからは、人としての優しさや、相手を気遣う「思いやりの心」が、これまで以上にもっと必要になるだろうと思います。

今年度、ウイルスに感染した人や、医療に関係する人々を差別する言動がたびたび取り上げられました。人を差別することは、あってはならないことなのです。人としてやってはならないことだと私は思います。

みなさんには、優しく、相手のことを考えることができる社会、誰もが、一人も取り残されることなく、安心して過ごせる社会をつくってほしいと強く願っています。みなさん一人一人が、「思いやりの心」を持ち続け、夢をかなえ、幸せに生き、自分も他の人も大切にできる、そんな社会をつくる担い手に、ぜひなってください。

これからも、港中学校で一緒に学んだ仲間を大切に、育ててくれたふるさとを大切に思い、あわてず、自信をもって、一步一步進んでください。そして、できることなら、周りの人に幸せを与えてください。みなさんのさらなる活躍と飛躍を願い、式辞とします。

式辞以外にも、次のようなことを卒業生には伝えました。

- 「命を大切にすること」
- 「学ぶことの大切さ」
- 「共に生きること」
- 「いつも謙虚に感謝の気持ちを忘れない」
- 「心も体も健康管理が大切」

答辞

三年前の春、これからの中学校生活への期待や不安を抱きながら入学しました。

中学生という新たな舞台、何もわからない私たちに先輩方は優しく教えてくださいました。そんな先輩方は私たちからは輝いて見えました。

二年生になり、私たちに初めての後輩ができ、先輩として教える立場になりました。まだ、小学生の気分が抜けていない人もいて、どう接したらいいのかわかりませんでした。一年前の自分もこんなふうだったろうと懐かしむ一方、先輩方のように恥ずかしくないようにふるまおうと気を引き締めました。

部活動では、日々仲間と切磋琢磨し練習に励みました。時には壁にぶつかることもありましたが、仲間と力を合わせ乗り越えてきました。そんな一生懸命部活に取り組んでいた日々が、心の支えであり楽しみでもありました。

そして、二年生の学年末から新型コロナウイルスにより長期の臨時休校になりました。普段忙しくてできなかったことができたり、自分の趣味に浸ったりすることができ、嬉しい一方、友達と会えない寂しさを感じつつ過ごしていました。何より、勉強の面では、二年生の学習範囲が終わるのか、受験には影響してくるのか不安を感じていました。

ついに三年生、学校の最高学年とともに、中学校最後の年。すべてのことに「最後」という言葉が付きまします。受験というものを身近に感じるとともに、三年間で最高の年にしようと思いました。

コロナ禍での最初の大きな行事は運動会でした。ソーランの練習で私たちは少人数のグループになり、一年生を教えました。例年では生徒一同が声を張り上げ応援していましたが、今年は拍手で熱意を表しました。

そして、中学校生活最大の行事であり、楽しかった修学旅行。私たちは修学旅行がなくなると思っていました。先生方のおかげで修学旅行に行くことができました。先生方、本当にありがとうございます。ジオパークでは、和歌山の地形について学び、串本海中公園では、ウミガメを見ることができました。アドベンチャーワールドでは、かわいい動物たちに心を癒されました。グループ活動では、友達の普段は見せない一面を知り、より一層絆が強まりました。決して忘れることのない最高の二日間になりました。

文化祭では、杉浦さんの話を聞き、とても心を動かされました。今年の合唱コンクールは、練習や合唱形態など、制限された形で行われましたが、各クラス精一杯頑張りました。どのクラスも素晴らしい合唱でした。

今年は臨時休校もあり、様々な制限がある中過ごしてきました。行事も例年通りには行われず不満もありました。しかし、先生方の頑張りののおかげで、楽しく過ごせたと私は思います。私たちを支えてくださったすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

真剣なまなざしで、時にはユーモアをまじえ、授業や部活動を指導して下さった先生方。授業中、先生の話も聞かず、困らせてしまったこともありました。叱られたり、きつい言葉をかけられたりして、うっとうしく感じていましたが、今考えると、あれは私たちに必要不可欠なものだったと思います。先生方との思い出は数え切れません。本当にありがとうございます。

私は前期生徒会長になり、生徒代表としての責任感とプレッシャーを感じていました。しかし、学校をよくするために、意見を交わし合ったりすることに やりがいを感じ、とても楽しい時間を過ごすことができました。生徒会の活動を通して感じたことは、港中は友達を思いやれる人が多いということです。これからも人を思いやる気持ちを大切に、それを引き継いでほしいです。

今年は出席をされていない在校生の皆さん、私たちは先輩として何か伝えられたでしょうか。少し頼りないところもあったかもしれませんが、しかし、私たちは港中学校を良くしようと頑張ってきました。これからは皆さんで港中学校をより良い学校にしてください。お願いします。

今まで十五年間、私たちを育ててくれたお父さん、お母さん、本当にありがとうございます。いつもわがままを言って困らせ、心配をかけてばかりでした。少しずつ大人になれるよう努力します。これからも私たちを温かく見守ってください。そして、今日まで一緒に笑い合ったりけんかしたり、助け合ったりした仲間たち。この春からはみんな離ればなれになってしまうけど、それぞれが決めた道、ここからが新しいスタートです。たとえ険しい道でも強く歩んでいきましょう。みんなと過ごした日々は決して忘れません。今までありがとう。

最後になりましたが、これからの港中学校のご発展と、先生方や在校生の皆さんのさらなるご活躍とご健康を心よりお祈りし答辞とさせていただきます。